

~~~~~  
 雑 報  
 ~~~~~

連星コロキウム報告

1990年11月5日から13日にかけて、韓国 Yonsei (延世) 大と ISSA (天文宇宙科学研究所) において International Colloquium on New Frontiers in Binary Star Research が開催された。コロキウムのメインテーマは“連星研究最前線”についてであり、これからの連星研究を展望し模索するのがねらいであった。参加した研究者は、14国174名にのぼり、約80の講演が行われた。日本からは15名が出席した。

このコロキウムは、Nebraska 大の Leung と Yonsei 大の Nha が提唱し (この二人が Co-chair), 当初はアメリカと韓国2国のコロキウムであったが、参加希望者が次第に増え、Pacific Rim Colloquium と改称されてからはカナダ、日本、中国、インドネシアも正式に参加した。会場に着いてみれば、International Colloquium と名称が再度改称されていた。このコロキウムが連星研究者にとって時宜を得たものであったので、世界中から研究者が参加を希望したからである。

会場は、ソウル (Yonsei 大) とテジョンの2箇所、まずソウルで開会式と5つのセッションがあり、次にバスでテジョンに移動して4つのセッションとポスターセッションが行われた。このあと ISSA を見学し、ソウルに戻り帰国する組と、キョンジュ (慶州) を回って帰る組に分かれた。

講演予講集のプログラムは、Leung が毎朝コーヒーを飲みながら臨機応変に (自由自在に?) 作りかえるので、講演時間が大きく変更になってあわてていたスピーカもいた。最近の恒星関係の会議にみられるように若い研究者の出席が少ない傾向は今回もみられた。たがいに顔見知りの研究者どうしが、講演やコーヒーブレイクをフルに利用して熱心に新しい情報を得ようとしていたのが印象的であった。

主な講演としては、全自動の無人 CCD photometry を行なって多数の連星を一気に観測しようという話 (Honeycutt), 連星のモデル作りのための新しい計算コード (Wilson), interferometry による連星研究の最先端 (McAlister), 視線速度観測における cross-correlation 法の重要性 (Hill, Popper), 激変星生成理論の現状 (Webbink), 星風 X 線源のガス流のシミュレーション (Taam), NASA の次期観測衛星計画 (Kondo) などがあった。日本からの研究者の講演は10で、磯部、岡崎 (代読)、山崎、ハキム・マラサン、中村、北村、川畑、田辺、小暮、李の各氏が講演した。

また、各国の天文学研究 (おもに観測面) の現状・将

来計画の紹介があった。日本の紹介は小暮智一先生が話をされた。IAU Comm. 42 (近接連星) の委員長の Koch は、恒星研究、連星研究に若い人が来ないのをたいへん憂えているのであるが、小暮先生もキョンジュで日本でも全く同じことが起こっていることを報告された。その分いま恒星、連星を研究している者が、もっと密接に協力しあってこの分野を支えていかなければならないのだろう。

今回のコロキウムの集録は PASP Conference Series として出版される予定である。編集者は Leung。

秋も深まってキャンパスの樹木が美しく黄葉した Yonsei 大での連日のホットな議論のあと、私達はソウルの学生街 (Yonsei 大の近くに梨花女子大がある) でこれもホットな韓国料理を楽しんだ。〔謝辞: 今回のコロキウムが成功裡に終わったのは、Co-chair の Leung 教授, Nha 教授, および Yonsei 大, ISSA, KSSS の皆様, また KOSEF, NSF の後援のおかげです。〕

山崎篤磨 (防衛大)

ヘルクレス座 1991 年新星

兵庫県加古川市の菅野松男氏は、1991年3月25日早朝3時45分 (24.781日 UT) からそれぞれ16秒露出した3駒の写真フィルム上で、光度5.4等級の新星状天体像を発見して国立天文台へ連絡して来られた。発見位置は

$$\alpha = 18^{\text{h}}44^{\text{m}}2, \quad \delta = +12^{\circ}18' \quad (1950.0)$$

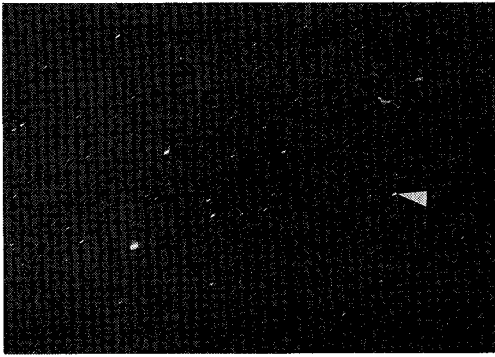
である。

この付近には BB Her と名付けられた変光星があるがこの変光星の位置は GCVS によると $\alpha = 18^{\text{h}}43^{\text{m}}35^{\text{s}}$, $\delta = +12^{\circ}17'0$ (1950.0) であり、変光幅は 9.76~10.46 等、周期 7.5 日のケファイド型である。光度から考えると、この BB Her ではあり得ない、ということから直ちに国際天文学連合天文電報中央局へ連絡した。

菅野氏は兵庫県西部の西はりま天文台公園の敷地内でペンタックスに焦点距離 55 mm F1.8 の標準レンズを使用し、三脚による固定 (静止) 撮影を行い、撮影後に自宅で現像処理を済ませ、フィルムを検査して像を発見された。そのため、撮影時刻は 25日 3^h45^m であったが、国立天文台への通報は当日の 22 時を過ぎていた。

国立天文台からの通報の後、IAU 天文電報中央局からのテレックスは菅野氏に遅れること 0.41 日 (25.19 日 UT) にイギリスの G. オルコックが眼視により発見したことを告げている。

その後世界各地の天文台で観測が行われ、オーストラリア・サイディングスプリング天文台のウプサラ天文台シュミットによりアデレード大学の R. H. マックノートは、次の位置を観測より求めている。



ヘルクレス座 1991 年新星の菅野氏による発見時の写真(左下の輝星は ζ Apl)

$$\alpha = 18^{\text{h}}44^{\text{m}}11^{\text{s}}.83, \quad \delta = +12^{\circ}10'45''.0 \quad (1950.0)$$

さらに何人かの人の位置観測があるが、ここでは省略しておく。マックノートによると、パロマー写真星図の上記の位置近くには青色の星は見当たらないが、しかし、その近くには約 19 等、約 14 等、約 16 等の星がある、と報告している (IAUC 5222, 5223 等)。尚、筆者のノートによると日本人として 36 個目の新星 (超新星を含む) 発見である。 (香西洋樹)

お知らせ

東北大学理学部天文学教室教官公募結果

天文月報第 83 巻 3 月号 (1990) に掲載された当教室の助教授あるいは助手 1 名 (天文学・観測) の公募については、下記のとおり決定しましたので報告致します。

氏名 谷口義明

現在の所属・職 東京大学理学部

天文学教育研究センター・助手

着任時期 1991 年 4 月 1 日

東北大学理学部天文学教室

主任 竹内 峯

学会だより

日本学術会議第 15 期会員候補者の決定

日本学術会議に登録した会員 (特別会員) を対象に選出しました標記会員候補者の開票は、去る 1 月 17 日に行いました。

この結果を踏まえて当学会・評議員会は 1 月 19 日に次の両氏を候補者に決定しました。

杉本大一郎氏、磯部瑠三氏

この結果は、1 月 30 日に日本学術会議に届出ました。

そして日本学術会議推薦管理会から上記両氏の資格認定通知が 3 月 15 日付で日本天文学会に連絡されております。

以上、日本天文学会の内規に従いまして順調に手続きが終了しましたことを会員の皆様にご報告 (日本学術会議会員候補者推薦内規第 10 条) するとともに御協力を感謝致します。

国際学術交流基金による海外学術交流活動の援助

昨年度、小暮智一記念事業会より本会に寄附のありました 100 万円について、同事業会の意向に添って、国際学術交流基金として、若手研究者の海外学術交流のために使用することになりました。つきましては、下記要領で、この基金による援助希望者を募集致します。

1. 募集期間: 1991 年 4 月 10 日 ~ 1991 年 6 月 10 日 (当日消印有効)
2. 対象者: 大学院学生 (学振など各種研究員も含む)、又は最近助手になったばかりの若い研究者
3. 援助の条件: 1991 年 12 月末日までに、各種国際研究集会、又は観測等で、海外に出かける予定の人で、この基金以外の財政的援助を全体費用の 50% 以内しか受けていない (又は受けられない見込) の人。
4. 採用人数および援助額: 1 人 15~20 万円以内 (全体費用の 50% を限度) で、5~6 人 (ただし応募者多数の場合はこの限りではありません)
5. その他: 応募にあたっては、氏名、所属、学年又は年齢、学生の方は指導教官名その他、次の資料を添えて下さい。
 - ① 参加する研究集会 (又は観測計画) の内容の概略 (例、IAU Symp. ○○, タイトル, 期間, 開催地, 内容の概略) を記したものを、
 - ② これまでに得られている (又は得られる予定の) 資金援助の内容を示すもの
 - ③ その他、もしあれば、招待状等、援助の必要を示す資料。
 なお、応募者多数の場合には、選考が行われる場合があります。
6. 応募先: 〒181 三鷹市大沢 2-21-1
国立天文台内 日本天文学会
国際学術交流基金募集係
7. 問い合わせ先: この件についての質問は、吉澤庶務理事 (国立天文台 Tel. 0422-41-3786)、又は学会事務所 (Tel. 0422-41-3648) に問い合わせして下さい。